

I

【原文】

天君(二)問、天下何故難安(三)哉。五行神吏上對曰(三)、今帝王乃居百重之内、去(四)四境萬萬餘里、遠(五)者多冤結、善惡不得上通達(六)、奇方(七)異策斷絕、不得到(八)帝王前(九)。民臣冤結、不得自訟通也。為此積久、四方蔽塞、賢良(一〇)因而伏藏(一一)、帝王不得(一二)奇策異辭以安天下、咎(一三)在四面八方遠界閉不通。

【校勘】

『太平經』卷八八・作來善宅法第一二九

- (1) 「天君」、經作「公」。
- (2) 「安」、經作「平安」。
- (3) 「曰」字、經作「言」。
- (4) 「去」下、經有「其」字。
- (5) 「遠」、經作「大遠」。
- (6) 「達」下、經有「也」。
- (7) 「奇方」下、經有「殊文」。
- (8) 「到」下、經有「其」字。
- (9) 「前」下、經有「也」字。
- (10) 「良」字、經作「儒」。
- (11) 「藏」下、經有「久懷道德、悒悒而到死亡」。
- (12) 「得」下、經有「其」字。
- (13) 「咎」、經作「大咎」。

【訓読】

天君問うに、天下何故に安んじ難きや、と。五行神吏、上して對えて曰わく、今、帝王乃ち百重の内に居り、四境を去ること萬萬餘里。遠き者は多く冤結し、善惡は上に通達するを得ず、奇方・異策は斷絶し、帝王の前に到るを得ず、民臣冤結し、自ら訟通するをざるなり。此を爲して積ること久しく、四方蔽塞し、賢良は因りて伏藏し、帝王は其の奇策異辭の以て天下を安んずるを得ず。咎は四面八方の遠界、閉ざして通ぜざるに在り。

【訳文】

天君が問うに、「天下は何故に安定するのが難しいのか」と。五行神吏が上言して答えて言うには、「今、帝王は幾重にも囲まれた宮中に居り、四方の辺境からは遙か遠く離れている。遠方の人々は多くが鬱屈し、善いことも悪いことも上に伝えることができず、奇方異策も断絶して帝王の前に到達することができない。官民とも鬱屈し、自ら訴えを伝えることができない。このような状況が長く積もりに積もって、四方は閉塞し、賢良はこのため身を潜め、帝王はその奇策異辭を得て天下を安定させることができない。この過ちは

四方八方の遠隔の地が、閉ざされて中央に通じていないことにある」と。

【注】

○五行神吏

『太平經』卷七一「五、為大道神者、人神出、迺與五行四時相類、青赤白黃黑、俱同藏神、出入往來、四時**五行神吏**為人使、名為具道、可降諸邪也。」

○今帝王乃居百重之內

『三國志』卷六五賀邵伝「古之聖王、所以潛處**重闈**之內而知萬里之情、垂拱衽席之上、明照八極之際者、任賢之功也。……陛下處九天之上、**隱百重之室**、言出風靡、令行景從、親洽寵媚之臣、日聞順意之辭、將謂此輩實賢、而天下已平也」。

○去四境萬萬餘里

『太平經』卷八八・作來善宅法第一百二十九「今**四境**之界外內、或去帝王**萬萬里**、或有善書、其文少不足、乃遠持往到京師……或有**四境**夷狄・隱人・胡貊之屬、其善人深知祕道者、雖知中國有**大明**道德之君、不能遠故齎其奇文善策殊方往也」。

○冤結

『漢書』卷七一于定國伝「然上(元帝)始即位、關東連年被災害、民流入關、言事者歸咎於大臣。……(元帝曰)民多**冤結**、州郡不理、連上書者交於闕廷。二千石選舉不實、是以在位多不任職」。

『潛夫論』三式「今者刺史・守相、率多怠慢、違背法律、廢忽詔令、專情務利、不郵公事。細民**冤結**、無所控告、下土邊遠、能詣闕者、萬無數人、其得省治、不能百一」。

○賢良因而伏藏

『荀子』王制「**選賢良**、舉篤敬、興孝弟、收孤寡、補貧窮。如是、則庶人安政矣。庶人安政、然後君子安位」

○遠界

『尚書』禹貢第一「疏」凡四海之內、斷長補短、方三千里者、彼自言不盡明、未至**遠界**」、

II

【原文】

人居天地之間(一)、開闢已(二)來、人人各一生、不得再生也。自有名字為人。人者、**迺**(三)中和凡物之長也(四)、尊且貴、與天地相似。今一死、**迺**(五)終古窮天畢地、不得復見自名為人、不復起行也。故悲之大冤之(六)。天地格法(七)。

天地(八)為萬物父母、恐其中有自冤哭泣、仰呼天俯叩地、而自悲冤得少年(九)。故天為(十)生真道奇方、可以自防而得小壽者。物生皆自有老終、而愚人不肯力學真道善方、可(二)以永享(12)其年、不死遲老者。反各自輕忽、不求奇方而共笑賤真道。反(13)共作邪偽、以亂天道。共欺其上、爭致(14)死地名為冢、修之治(之)(15)以待死、預作死約及凶服、求死得死、有何(16)冤哉。年竟算盡、此比若日出自有入也。

古者聖人帝王時時有大自重愛而畏死者、且夕思行求異聞殊方、敬事道人、力盡財空而已。至誠涕出、感動皇天、乃為出瑞應、道術之士悉佐(17)之、故多得老壽、或得度世(18)。今天地乃以人為子、帝王乃最天(19)貴子也、不惜真道奇方焉(20)。故(21)深計遠慮、知天下之財物、會非久(22)其有也。

古者聖人聰明大達、衆賢悉出、上集為輔、故冤結、天地亦有其理(23)、況人倫乎(24)。帝王得(25)以垂拱無憂、賢者亦得盡忠信(26)、上輔其君為理(27)、共解天地大憂、萬民因而興。豈不善哉(28)。

【校勘】

『太平經』卷九〇・冤流災求奇方訣第一三一

- (1) 「間」下、經有「從天地」。
- (2) 「已」、經作「以」。
- (3) 「迺」、經作「乃」。
- (4) 「也」下、經有「而」字。
- (5) 「迺」、經作「乃」。
- (6) 「之」下、經有「也」字。
- (7) 「故悲之大冤之」下、經有「噫、子說與俗人同、又實非也。愚生甚不睹其意、人死當奈何哉。願聞之、唯天師。然、夫物生者、皆有終盡、人生亦有死、天地之格法也」。
- (8) 「地」下、經有「乃」字。
- (9) 「少年」、經作「年少」。
- (10) 「生」下、經有「其」字。
- (11) 「可」、經作「何」。
- (12) 「永享」、經作「小增」。
- (13) 「反」下、經有「曰」字。
- (14) 「致」、經作「置」。
- (15) 「治」下、經有「之」字。
- (16) 「何」下、經有「可」字。
- (17) 「佐」、經作「往佑」。
- (18) 「度生」下、經有「其中時時有求而不得者、但未至誠固固、好俗事、輕忽其身、言可再得也」。
- (19) 「天」下、經有「之所」字
- (20) 「焉」下、經有「子知之耶。唯唯。是」
- (21) 「故」下、經有「古者聖人」
- (22) 「久」下、經有「是」字
- (23) 「故冤結、天地亦有其理」、經作「故兩無冤者也。天地亦為其理、無病而不冤」
- (24) 「況人倫乎」、經作「何況於人乎哉」。
- (25) 「得」下、經有「之」字。
- (26) 「忠信」、經作「其忠信之心」。
- (27) 「理」、經作「治」。
- (28) 「共解天地大憂、萬民因而興。豈不善哉」、經作「亦得盡其能力勉勉、使共解天地大憂、百姓萬物亦復得之而興也。故言善哉也」。

【訓読】

人、天地の間に居り、開闢より已來、人人各おの一生、再生するを得ざるなり。名字を

有するに自りて人と爲る。人は迺ち中和凡物の長なり。尊且つ貴、天地と相似る。今一たび死せば、迺ち終古、窮天畢地、復た自ら名づけて人と爲るを見るを得ず、復た起行せざるなり。故に之を悲しみ、大いに之を冤む。天地の格法なり。

天地は萬物の父母爲り。其の中に自ら冤みて哭泣し、仰ぎて天を呼び、俯して地を叩き、自ら悲冤して少年を得る有るを恐る。故に天は爲に真道奇方を生じ、以て自ら防ぎて小壽なる者を得べし。物生ずれば皆な自ずから老終有り、愚人は力めて真道善方を学ぶを肯んぜず、(何ぞ)以て永らく其の年を享け、不死遅老なるや。反つて各おの自ら輕忽し、奇方を求めず、而かも共に真道を笑賤し、反つて共に邪偽を作し、以て天道を亂し、共に其の上を欺く。争いて死地を致し、名づけて冢と爲し、之を修め(之)を治め、以て死を待ち、預め死約及び凶服を作り、死を求めて死を得るに、何の冤有らんや。年竟り算盡くは、此れ比ぶるに日の出でて自ずから入る有るが若きなり。

古は聖人・帝王、時時大いに自らを重んじ愛おしみ、死を畏るる者有り。且夕、行きて異聞殊方を求め、敬しんで道人に事うるを思い、力盡き財空しうするのみ。至誠涕出し、皇天を感動せしむ。(天)乃ち爲に瑞應を出し、道術の士は悉く之を佐く。故に多く老壽を得、或は度世するを得。今、天地は乃ち人を以て子と爲し、帝王は乃ち最も天の貴子なり、真道奇方を惜しまず。故に深計遠慮し、天下の財物の會ず久しく其の有に非ざるを知るなり。

古は聖人、聰明大達、衆賢悉く出で、上つかた集まりて輔を爲す。故に冤結するも、天地も亦た其の理有り、況んや人倫をや。

帝王は以て垂拱して憂なきを得、賢者も亦た忠信を盡くして上つかた其の君を輔けて理(治)を爲すを得、共に天地の大憂を解き、萬民因りて興る。豈に善ならざらんや。

【訳文】

人は天地の間に居り、天地開闢のときから、人はそれぞれ一度だけ生き、再生することはできない。名づけられて「人」となる。人はすなわち中和であり万物の長である。尊いうえに貴く、天地と似ている。今、一度死ねば、永久に天地が終わるまでも、もう一度自らを名づけて人となることは見られず、また行動することはできない。このため、死を悲嘆し、大いに憾むのである。(それが)天地の法である。

天地は萬物の父母である。その中には自ら憾みを抱いて号哭し、仰いで天を呼び、俯いて額を地に打ち付け、自ら悲しみ憾んで寿命が短くなるものがあるのを恐れている。このため、天はその人々のために真道奇方を生みだし、自ら防いでいささかの寿命を得られるようにした。萬物は生を享ければ、みな自然に老いて死去する。しかし、愚かな人々は努力して真道善方を学ぼうとせず、どうして寿命を享受して不死・遅老となることができようか。かえってそれぞれ自ら輕んじて疎かにし、奇方を求めず、しかも共に真道を嘲笑つて賤しみ、かえって共に邪偽を行い、そうやって天道を亂し、共にその上にいる者を欺く。争つて「死地」(死後の土地)を入手し、名づけて「塚」とし、あれこれ營造して死を待ち、あらかじめ「死約」(死後の約束)と凶服を作っている。死を求めて死を得ているのであって、何の憾みがあるうか。寿命が尽きるのは、これは喩えれば太陽が出れば自然に没するようなものである。

その昔、聖人や帝王にはいつも自らを重んじ愛おしみ、死を畏れる者がいた。朝も晩も

出かけて異聞・殊方を求め、つつしんで道人に仕えることを願い、力も尽き財も空になるだけであった。その至高の誠実さは涙を溢れさせ、天を感動させる。そこで天は感応して瑞祥を降し、道術の士はこぞって聖人と帝王を輔佐した。このため、その多くが長命を手に入れ、あるいは度世(仙去)したのである。今、天地は人を子とするが、帝王はつまりその中でも至上の天の貴子であり、真道奇方を惜しみなく授ける。それ故に、(帝王は)深遠で広汎な思慮をめぐらし、天下の財物が必ず永久に自らの所有ではないことを知るのである。

その昔、聖人は聡明で道に通曉し、多くの賢者がこぞって姿を現し、上に集まって輔佐した。このため鬱屈があっても、天地もまたそれを治めた。まして人類に対してはそうである。

帝王はそれによつて何もしくとも政治に憂いなく、賢者もまた忠信を盡くして、上方のその君を輔佐して政治を営み、ともに天地の大きな憂いを解き、萬民もこれに困って興隆する、どうして善いことではないか。

【注】

○人人各一生、不得再生

『太平經』卷七二・不用大言無效訣第一一〇「凡天下人死亡、非小事也、壹死、終古不得復見天地日月也、脈骨成塗土。死命、重事也。人居天地之間、人人得壹生、不得重生也。重生者獨得道人、死而復生、尸解者耳」。

○自有名字

『太平經』卷三六・事死不得過生法第四六「故陰勝則鬼物共為害甚深、不可名字也。迺名為興陰、反衰陽也」。

『太平經』卷四九・急學真法第六十六「夫有真道、乃上善之名字。夫無道者、乃最惡衰凋兇犯死喪之名稱也。……夫人有真德、乃能包養無極之名字。夫無德者、乃最劣弱困窮小人之名字也」

○中和凡物之長

『太平經』卷一一六「又人者、是中和萬物之長也」。

『太平經』卷一八〇三四(太平經鈔乙部)「日象人君、月象大臣、星象百官、眾賢共照、萬物和生。故清者著天、濁者著地、中和著人」。

『太平經』卷四五・起土出書訣第六一「夫天地中和凡三氣、內相與共為一家、反共治生、共養萬物」。

『太平經』卷四八・三合相通訣第六五〔附〕「天氣悅下、地氣悅上、二氣相通、而為中和之氣、相受共養萬物、無復有害、故曰太平」。

『太平經』卷四五・起土出書訣第六一「書以付歸有德之君、宜以示凡人、人乃天地之子、萬物之長也」。

*『太上三十六部真經』「上清境靈祕經第八」(道藏一八、一九冊)「夫人居天地之間、開闢以來、自有名字為人、人迺中和之氣、凡物之長也。尊且貴、與天地相似、而不能與天地長久」(道藏提要 p.10 唐初またはそれ以前の成立)

○終古窮天畢地

『舊唐書』卷一六〇韓愈傳「上表…臣負罪嬰釁、自拘海島、戚戚嗟嗟、日與死迫…窮

思畢精、以贖前過。懷痛窮天、死不閉目」。

『太上洞神淵淵神呪治病口章』「死入九幽長夜地獄、終天畢地、渴飲寒水、飢食鐵丸、吞服火煙、千年萬劫、輪轉五道、徘徊塗炭、流曳八難」(道藏一〇〇八冊。道藏提要…東晉南北朝成立か)。

○天地格法

『太平經』卷九〇・冤流災求奇方訣第一三一「夫物生者、皆有終盡、人生亦有死、天地之格法也。天為其中、時時且有自冤死者、或自少年不壽者。」(鈔の次の段落「天地乃為萬物父母」の前)

○天地為萬物父母

『太平經』卷五三・分別四治法第七十九「天地者、為萬物父母、父母雖為善、其子作邪、居其中央、主為其惡逆、其政治上下、逆之亂之。父母雖善、猶為惡家也」。

『太平經』卷四九・急學真法第六六「所以然者、夫天地、乃萬物之父母、凡事君長、故常導之以善、不敢開昌導、教之以兇惡之路、而況人乎。人者、天之子也、當象天為行。今乃失法、故人難治」。

『尚書』泰誓上「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈。(注)生之謂父母、靈、神也、天地所生、惟人為貴」

○哭泣仰呼天、俯叩地

『太平經』卷一八至三十四不分卷(太平經鈔乙部)「民皆上呼天、縣官治乖亂、失節無常、萬物失傷、上感動蒼天、三光勃亂多變、列星亂行」。

『太平經』卷四八・三合相通訣第六五「官職亂、民臣愁、則復仰呼天、自言冤、上動天、復增災怪」。

『太平經』卷九〇・冤流災求奇方訣第一三一(太平經鈔の続き)

「若無故冤悲、不求奇方真道而死者、反捶胸哭泣、呼天叩地、汝身自得之、反過天地、是為反民、天甚怨惡之」。

『隋書』卷四八楊素傳「我有隋之御天下也、于今二十有四年、雖復外夷侵叛、而內難不作、修文偃武、四海晏然。朕以不天、銜恤在疚、號天叩地、無所逮及」。

○得小壽

『太平經』卷九八・神司人守本陰祐訣第一五六「夫度去者、萬未有一人。大壽者、千未有一人也。小壽者、百未有一人也。竟其天年者、比是也」。

『太平經』卷一八至三四不分卷(太平經鈔乙部 解承負訣)「上壽一百二十、中壽八十、下壽六十」。

○死地、死約

『太平經』卷九〇・冤流災求奇方訣第一三一(鈔の次の文)「今人求死得死、求惡得惡、求善得善、天順其心、是為大吉、可求者得。若人預爭置死地、作死約、得死是也。日求兇、得兇惡而死、復是也」。

『太上三十六部真經』上清境經上[0008]

而有所求、亦不肯力學真道善方、自生輕忽、而共生悔恨、笑賤真道、反以為邪偽、但求小利、以亂天道、欺罔正真。自致死地、一切愚人、皆知有死、修治墳塚、皆欲堅固不壞、預修、作死約、製造凶服、以遺子孫、用多置財寶、以為威儀、具備世俗。

○日出(日)入

『太平經』卷七〇・學者得失訣第一〇六「但為善者、比若向日出、猶且彰明也；為惡者、比若向日入、猶且冥冥。此天地陰陽自然性也」。

○聖人帝王

『太平經』卷六六・三五優劣訣第一〇二「是故古者聖人帝王欲自知優劣、以此占之、萬不失一也」。

○重愛

『太平經』卷七二・不用大言無效訣第一百一十「令使上德道君重之愛之、於其有功者賜之、眾人且願之、於其願之而大從、使其為之、於其得者共尊敬愛之」。

『太平經』卷九〇・冤流災求奇方訣第一三一「夫愚人不自重愛、力求奇殊方、可得須臾、反預置死器死處、求得死」。

○力盡財空

『太平經』卷九〇・冤流災求奇方訣第一三一（太平經鈔の続き）「身在、財物固固屬人身。身亡、財物他人有也。故無可愛惜、極以財物自輔、求索真道異聞也。故其身反得長存、財則在、常屬於人也。是故當極力財空盡而已。財者、但過求、須臾得之耳。失財、乃天下人之有也、會不久吾有也。此名為賢聖明智、養身以道、知用財法、故多得老壽也」。

○至誠涕出

『太平經』卷九六・忍辱象天地至誠與神相應大戒第二五三「至誠可專念、乃心痛涕出」。

○最天貴子

『太平經』卷七三〜八十五・闕題「帝王行道德興盛、日大明、少道德少明。皇后行道德、月大光明、少道德少光明。衆賢行道德、星曆大耀、少道德少耀。四根俱行道德、天下安寧、瑞應出、大光遠。遙觀天象、風雨時善、夷狄歸心、災害自消。．．．帝王尸（王明）尸疑當作「乃」上皇天之第一貴子也、皇后乃地之第一貴女也。夫至神聖貴人、職當居百重之內、而反憂天下萬里之外、受天業為陰陽六合八方持統首」。

○聰明大達

『莊子』外物篇「飾小說以干縣令、其於大達亦遠矣」。

『太平經』卷九〇・守一入室知神戒第一五二「君得以為大聰明大達也、舉事悉得、無失正者」。

○人倫

『荀子』富國篇「人倫並處、同求而異道、同欲而異知〔唐・楊倞注〕倫類也、並處羣居也。其在人之法數、則以類羣居也」。

『北齊書』卷三文襄紀（侯景報書曰）禽獸惡死、人倫好生、僕實不辜、（晋）桓・莊何罪」。

○垂拱無憂

『尚書』武成第五「惟食喪祭民、悼信明義、崇德報功、垂拱而天下治〔言武王所修、皆其所任得人、欲垂拱而天下治〕」

『太平經』卷六七・六罪十治訣第一〇三「凡人莫不俱好德化而為善者也。為教如是、迺上有益於天、下有益於地、即大化之本根、助帝王養人民、令不犯惡為耶、君子垂拱而無憂、其功著大、天地愛之、可移於官也」。

○天地大憂

『太平經』卷六七・六罪十治訣第一百三
上犯天文、下犯地形、其行逆四時、亂五行、為君子大憂、為小人起害、為賊盜、或還以自
敗、僂其父母、因而無世。

III

【原文】

大集難問、天地毀起、日月星蝕、人烈死、萬二千國策符子(1)字)開神文(2)(3)。三光、
何故得(4)蝕也(5)。天地之大怒、天地戰鬪不和、其驗見効於日月星曆(6)。然亦(7)蝕、亦
不可蝕(8)、咎在陰陽氣戰鬪(9)。陰陽相紆、迭爭勝服(10)。夫陰與陽、本合(11)相利祐、
共生(12)和氣、而反戰鬪、悉過在此不和調。如使和調、不蝕也(13)。上古最善之時、常在
(14)不蝕、中古漸(15)失天地之(16)意(17)、陰陽稍稍不相愛、故致(18)戰。子以吾言不然
也(19)。使有德之君(20)按(21)行吾文、盡得其意、戰鬪且止、小得其意、小止、半得其意、
半止。

帝王多行道德、日月為之不蝕、星曆(22)不亂(23)、比之(24)人、先有(25)相厚、久不相觀、
相觀當(26)大喜、必能(27)相祐利(28)、及(29)先不相與比、卒相逢便戰鬪矣(30)。

【校勘】

『太平經』卷九二「三光蝕訣」

(1)「子」、經作「字」。

(2)「文」、經作「訣」。

(3)經では卷九二(三光蝕訣第一百三十三、萬二千國始火始氣訣第一百三十四、火氣正神道
訣第一百三十五、洞極上平氣無蟲重複字訣第一百三十六)の卷末に「右大集難問天地毀起
日月星蝕人烈死萬二千國策符字開神訣」とある。

*合校三六五頁「符子係「符字」之訛」。

(4)「得」、經作「時」。

(5)「也」、經作「邪。善哉、子之所問。是」

(6)「曆」、經作「辰。然」

(7)「亦」下、經有「可」字。

(8)「不可蝕」、經作「可不蝕」。

(9)「鬪」下、經有「何故戰鬥乎」。

(10)「迭爭勝服」、經作「遞諍勝負」。

(11)「合」、經作「當更」。

(12)「生」、經作「爲」。

(13)「也」、經作「亦當不蝕邪。然、大洞」。

(14)「在」、經無「在」字。

(15)「中古漸」、經作「後生彌彌、共」。

(16)「之」、經無「之」字。

(17)「意」下、經有「遂使」。

(18)「致」、經作「至於」。

(19)「也」下、經有「子」字。

- (20) 「有徳之君」、經作「徳君」
(21) 「按」、經作「案」
(22) 「曆」、經作「辰」。
(23) 「不亂」下、經有「其運。何以然哉。又天性、陰陽同處、本當相愛、何反相害耶。又陰陽本當轉相生、轉相成功、何反相賊害哉。是子之愚也。子欲知其實」。
(24) 「比之人」、經作「比若人矣」。
(25) 「先有」、經作「人常」
(26) 「相觀當」、經作「一相得逢遇」。
(27) 「必能」、經作「則更」。
(28) 「利」下、經有「相譽相明」。
(29) 「及」下、經有「其素相與不比也」。
(30) 「矣」、經無「矣」字。

【訓読】

「大集難問、天地毀起、日月星蝕、人烈死、萬二千國策符子(字)開神文」。「大いに集まりて難問す。天地の毀起こり、日月星蝕し、人びと烈死し、萬二千國策符の字(鈔「子」)、神を開くの文」。三光、何故に蝕するを得んや。天地の大怒なり、天地戦闘して和せず、其の驗、效を日月星曆に見わす。然るに亦た蝕し、亦た蝕すべからずは、咎は陰陽の氣の戦闘するに在り。陰陽相い姦し、迭るがわる勝服を争う。夫れ陰と陽は、本より合に相利祐し、共に和氣を生ずべくも、反つて戦闘す。悉く過ちは此の和調せざるに在り。如使(もし)和調せば、蝕せざるなり。上古最善の時、常に蝕せざるに在り。中古漸く天地の意を失い、陰陽は稍稍相い愛おしまず、故に戦いを致す。子、以えらく、吾が言の然らずと。有徳の君をして吾が文を按行せしめ、盡く其の意を得れば、戦闘且つ止み、小なく其の意を得れば、小なく止み、半ば其の意を得れば、半ば止む。帝王多く道徳を行えば、日月は之が爲に蝕さず、星曆は亂れず。之を人に比ぶれば、先に相い厚き有り、久しく相い觀ず、相い觀て當に大いに喜ぶべく、必ず能く相い祐利す。先に相い與に比しまざるに及びては、卒かに相い逢えば便ち戦闘す。

【訳文】

「大集難問、天地毀起、日月星蝕、人烈死、萬二千國策符字(鈔・子)開神文」(大いに集まって質疑す。天地の破壊が起こり、日月星が互いを侵蝕し、人々が烈しく死に、一万二千国の策符に記された文字が神を顕現させるの文)」

日月星の三光は何故に侵蝕されるのだろうか。(それは)天地の大いなる怒りである。天地は戦闘して和解することなく、その驗は、日月星曆に結果があらわれる。しかし、侵蝕されるのも、侵蝕することができないのも、その災因は陰陽の氣が戦闘することにある。陰と陽が互いに相手を乱し、かわるがわる勝利し制圧することを争っている。そもそも陰と陽は本来は互いに役立ち助けあい、共に中和の氣を生ずるべきだが、かえって戦闘している。すべて過誤はこの陰陽が調和しないことにある。もし調和すれば、侵蝕しあうことはない。上古の最善の時代には、いつも侵蝕することがなかった。中古にだんだんと天地の意を失い、陰と陽はだんだんと相手を愛おしまくなり、このため戦いに挑んだ。あなた

は私の言葉が間違っていると思うか。有徳の君主に私の文をしらべさせよ。すみずみまでその意図がわかれば戦鬪でさえも止み、少しその意図がわかれば少し止み、半ばその意図がわかれば半ば止むのである。

帝王が多く道徳を実践すれば、日月はこのために侵蝕されず、星の運行が乱れることもない。これを人に喩えれば、先に厚い付き合ひがあり、長らく相手に会っていないと、会えばきつと大喜びし、必ず助け合うことができる。先に互いになじみがないものに至っては、急に出会えばすぐに戦鬪になるのである。

【注】

○大集難問

『太平經』卷九八「包天裏地守氣不絕訣第一六〇」「願及天師請問一事乃止。行言、何疑哉。凡道包天裏地、誰持其氣候者」、「署置官得失訣第一六一」、卷末「右大集難問天地氣候為道與不吉兇君署置官得失文」

『太平經』卷九六・守一入室知神戒第一五二「以為道恐有遺失、使天地文不畢備、故復次之以大集之難、以解其疑」。卷末「右大集難道德至誠天戒以示賢」。

『太平經』卷一一九・三者為一家陽火數五訣第二一二「善哉子之難問、得其意。吾常甚好子之言。子之言、常發起吾意、使吾道興。子向不能難問、誰復而難問者乎」

『大般涅槃經』卷上「爾時、世尊告阿難言、汝今可語、此大林中、重閣講堂、諸比丘衆、皆悉令往大集講堂。阿難奉勅、即便普語諸比丘衆、世尊皆令往大集堂。比丘集已、阿難白佛、「諸比丘衆悉皆已集。唯願如來、自知其時」。

『放光般若經』卷九・無作「諸四天王釋、梵諸尊天適作是念已、應時十方各千佛應時悉現、皆說般若波羅蜜品。其弟子者亦如須菩提、其難問者皆如釋提桓因、亦如是問、與釋迦牟尼佛說般若波羅蜜等無差特」。

○天地毀起、日月星蝕

『西昇經』卷二「民之章第二十九。老君曰、民之所以輕命早終者、民自令之爾。非天地毀、鬼神害、以其有知、以其形動故也」。

○人烈死

『太平經』卷九二・萬二千國始火始氣訣第一三四「願請問、天地開闢以來、人或烈病而死盡、或水而死盡、或兵而死盡、願聞其意、何所犯坐哉。將悉天地之際會邪、承負之厄耶。然、古今之文、多說為天地陰陽之會、非也、是皆承負厄也。天氣中和氣怒、神靈戰鬥、烈病而死者、天伐除之。水而死者、地伐除之。兵而死者、人伐除也。」

○「右大集難問天地毀起日月星蝕人烈死萬二千國策符字開神訣」
太平經合校卷九十二己部之七太平經卷之九十二

三光蝕訣第一百三十三

萬二千國始火始氣訣第一百三十四

火氣正神道訣第一百三十五

洞極上平氣無蟲重複字訣第一百三十六

「右大集難問天地毀起日月星蝕人烈死萬二千國策符字開神訣」

○萬二千國

『太平經』卷九二・萬二千國始火始氣訣第一三四「請問、天下共日月、共鬥(斗)極、一

大部乃萬二千國、中部八十一域、分為小部、各一國。」「一國有變、獨一國日不明、名為蝕；比近之國、亦遙睹之、其四遠之國、固不蝕也。斗極凡星不明、獨失其天意者不明、其四遠固不蝕。」「今是日月運照、萬二千國俱共之、而其明與不明者處異也。有道德之國、其治清白、靜而無邪、故其三光獨大明也、乃下邪陰氣不得上蔽之也。不明者、咎在下共欺上、邪氣俱上、蔽其上也。無道之國、其治汙濁、多奸邪自蔽隱、故其三光不明矣。」

『佛說方等泥洹經』卷上「三、為佛力、自我作佛前後已動、三千日月·萬二千天地、無不感發、天人鬼神多得聞解」。

*『論衡』·難歲「鄒衍論之、以為九州之內五千里、竟合為一州、在東東位、名曰赤縣州。自有九州者九焉、九九八十一、凡八十一州」。『史記』卷七四·孟子荀卿傳「(鄒衍)以為儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳。中國名曰赤縣神州。赤縣神州內自有九州、禹之序九州是也、不得為州數。中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也」。

○萬二千國策符

『太平經』卷九二·萬二千國始火始氣訣第一三四「請問天師、萬二千國之策符各異意、皆當於何置之。各隨其國俗、宜以何為始」萬二千國殊策一通、以為文書上章、天氣且自隨而流行、真人自勵興之」。

○策符字開神

『太平經』卷一二〇(一三六辛部不分卷「今天之出書、神之出策符神聖之文、聖人造文造經、上賢之辭、此皆言也」。

『太平經』卷九二·洞極上平氣無蟲重複字訣第一三六「請問重複之字何所主、主導正、導正開神為思之也。· · ·如是者為子言之、以丹為字、以上第一· · ·如清水已飲、隨思其字、終古以為事身。· · ·或見其字、隨病所居而思之、名為還精養形。· · ·上士見人吞字、歸思亦然、當一吞字皆能教。· · ·既開天神、道歸於德君、付於賢良、人立自正、有益於上政明矣」。

○其驗見効於日月星曆

『孟子注疏』公孫丑章句上「孫奭疏· · ·又謂堯舜治天下但見効於當時、即一時之功也」。

○然亦蝕、亦不可蝕

經作「亦可蝕、亦可不蝕」

○陰陽氣戰鬪

『太平經』卷五〇·諸樂古文是非訣第七七「書卷上下衆多、各有事、宜詳讀之、更以相足、都得其意、已畢備、不深得其要意、言道無效事、故見變不能解陰陽戰鬥」。

○迭爭勝服

『太平經』卷四七·服人以道不以威訣第六四「今以嚴畏智詐勝服人、乃鬼神非惡之也、非獨鬼神非惡之也、乃陰陽神非惡之也、非獨陰陽神非惡之也。是故從天地開闢以來、天下所共病苦、而所共治者、皆以此勝服人者、不治其服者。故其中服而冤者、乃鬼神助之、天地助之、天地助之。故人者、亦治其勝人者、而助服其服者也。右分別勝服天地人鬼神所非惡所助法」。

○夫陰與陽本合相利祐

『太平經』卷九八·為道敗成戒第一五七「是故天之為象法也、乃尊無上、反卑無下、大無外、反小無內、包養萬二千物、善惡大小、皆利祐之、授以元氣而生之、終之不害傷也」。

○共生和氣

『太平經』卷一八、三四「陰陽者、要在中和。中和氣得、萬物滋生、人民和調、王治太平。……民氣不上達、和氣何從得興。中和乃當和帝王治、調萬物者各當得治。今三氣不善相通、太平安得成哉」

『太平經』卷四八・三合相通訣第六五「氣者、乃言天氣悅喜下生、地氣順喜上養；氣之法行於天下地上、陰陽相得、交而為和、與中和氣三合、共養凡物、三氣相愛相通」。

○使有德之君、按行吾文

『太平經』卷六九・天讖支干相配法第一〇五「真人得書、思之思之、以付歸上德之君、思吾文行之、與神無異、天即祐助之不宜時也」。

『太平經』卷三二・光蝕訣第一三三（太平經鈔の続きの段落）「吾文出之後、帝王德君思此天意、勿忘此言、此言所以致得天心之文也。如得天意、命乃長全也；不得天意、亂命門也；行而不稱天心、亦大患也。初上古以來、衆聖帝王以此為戒、深記吾言、結於胸心、乃微言可見、道可得也。以付上德之君、以救三光之鬥蝕也」。

【按行】

『太平經』卷四五・起土出書訣第六十一

天者養人命、地者養人形。今凡共賊害其父母。四時之氣、天之按行也、而人逆之、則賊害其父；以地為母、得衣食養育、不共愛利之、反賊害之。